The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	凝り固まった朱子学からの脱却 : 吾妻重二著『朱子学の新研究』
Author(s)	菊池, 孝太朗
Citation	中国研究集刊. 2019, 65, p. 82-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76125
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　李号（総六十五号）令和元年六月　八二―九三頁

凝り固まった朱子学からの脱却

――吾妻重二著『朱子学の新研究』

菊池孝太朗

二〇〇四年、吾妻重二氏の著書『朱子学の新研究』が出版された。本書は、南宋時代の大儒者朱熹に関して、著者が一九八五年から二〇〇四年までの約二〇年にかけて発表した研究成果を集約した論文集である。その内容は、朱熹の思想が根幹となっているものの、それだけに留まらない広い視野のもとで、北宋から清に至るまでの朱子学に関する研究が行われている。

その優れた研究内容については後に詳述するが、その前に、本書に対する先行の書評を二つ紹介する。

一つ目は、堀池信夫氏の書評「『開かれた朱子学』の世界」（『創文』四七五号　二〇〇五年）である。この書評では、各部についての内容の要約と、各部の有する思想史的意義について簡潔な解説が付されている。この書評の総括として、堀池氏は、「本書の魅力はなんといっても朱子学を中心軸に据えたそのうえに、広大なパースペクティブをともなっている点にある。（中略）しかも、「太極図」「象数」「皇極」「窮理」など、朱子学において本質的なものでありつつも、取り上げられることの少なかった問題（つまりそれほどに困難な問題だったということだが）に新たな光をもたらしているすぐれた研究である。（中略）本書は朱子学・宋学の研究領域に対して意義をもつだけのものではなく、その他の領域に対しても大きな刺激をあたえる可能性が強いと思われるからである。」（堀池論文、二六頁）と述べている。堀池氏がまとめたように、本書が包含する構成要素の広大さこそが、本書がすぐれた著作であることを明示している。

二つ目は、牛尾弘孝氏の書評「吾妻重二著『朱子学の新研究』（その一）（その二）」（『中国哲学論集』三五・三六号　二〇〇九・二〇一〇年）である。この書評は、二回に分かれたもので、一回目は第一部の紹介、二回目は第二部の第二篇までを紹介している。本書の内容の全てを論じてはいないものの、牛尾氏が本書に抱いた疑問を多く記しており、本書の思想史上における意義をより鮮明なものにしようとしている。特に、二回目の書評の中心的議論となった「朱熹の鬼神論と気の論理」については、紙面を割いて朱熹の鬼神論における「破綻説」と「非破綻説」とが主張されてきた経緯を紹介しており、今後の朱熹の「鬼神論」を研究する上での一つの指標になると思われる。

本稿では、以上二つの書評を前提として、可能な限り詳細に本書の内容を紹介したいと思う。加えて本書の思想史上における意義を伝えることができれば、幸いである。また、紙面の都合上、本書の目次については割愛させていただく。大まかな部立ては、緒言（本書、三頁～一八頁）、第一部「朱子学まで―北宋期の儒教とその展開」（本書、一九～一四六頁）、第二部「朱子学の思想」（本書、一四七頁～四九九頁）、第三部「朱子学雑篇」（本書、五〇一頁～五四八頁）の三部より構成される。

一　本書の概要

まず、緒言（本書、三頁～一八頁）である。ここでは、本書が何を目的として著述されたのか、歴史上における朱子学の特色とは何か（どの点において、朱子学が以前の思想より「新しい」のか）といった点について述べられている。本書の目的として特筆すべき点は、朱子学における「影響論」の考察であろう。著者は、従来、朱子学成立に関係すると考えられてきた思想的ファクターとして、以下の三つを挙げている。「第一に、唐代中期に始まる経学の自由研究的思潮、第二に、同じく唐代中期における韓愈、李翺の思想、そして第三に、仏教および道教の影響である」（本書、六頁）。著者はこれらのうち、第一、第二の事項は、自由な経書解釈の思潮や、思想内容の新展開という点において朱子学への影響を認めるものの、第三の事項である仏教及び道教の影響については疑問を呈している。例えば、朱子学の重要なタームである「理」という用語について、従来、華厳仏教からの影響論が示唆されてきたが、著者は、朱子学における「理」と華厳仏教における「理」とでは本質が異なるとして、その影響論を否定している。

以上のような朱子学にまとわり付いた従来のイメージを克服することによって、朱子学の思想的かつ史的位置を明確にするのが本書の目的である。また、朱子学は諸領域に跨がる総合的な学問である。そうした多彩な朱子学の思想的世界を浮き彫りにすることは、朱子学にまつわる他思想・他宗教の新たな世界を開拓するという副次的産物を生み出すことにも繋がると思われる。このように、朱子学の研究書でありながら、朱子学だけに留まらないという点も、本書の特色の一つである。

第一部は、「朱子学まで―北宋期の儒教とその展開」（本書、一九～一四六頁）と題され、朱子学が成立する以前の北宋期の儒学に焦点を当てた部分となる。

第一部第一篇は、「周惇頤『太極図』の考察」（本書、二一頁～八二頁）である。北宋の儒者 周惇頤が製作した「太極図」は、根源的一者たる太極から万物が展開していく過程を示したものであり、伝統的な中国における万物生成論を図式化したものである。この「太極図」と図の解説をした「図説」とに注目をしたのが、南宋の朱熹であり、朱熹が『太極図説解』を著して称揚したことによって広く世に知られた。

この「太極図」については、道教ないし仏教に由来すると考えられてきたのであるが、著者はこの議論が、この図が道士から伝えられたという伝承と、周惇頤が僧に師事したという実に実証性が不確かな事象が発端となっていることを受け、実際に周惇頤がそれら両宗教の影響を受けて「太極図」を製作したのかを再検討する。

まず、伝授については、実に曖昧模糊とした後世の伝承がもとになっていたことを、解き明かす。次に、綿密なる資料調査の結果、「太極図」は、両宗教の由来のものではなく、むしろ周惇頤が伝統的儒家思想を内包し、彼独自の思想によって製作されたものであったという結論を示す。更に、「太極図」について、著者は「儒仏道三教融合の産物というよりも、むしろ儒教が他の二教から自立しつつあったことを示している」（本書、四四頁）点において重要であったと考え、その上で太極図が道教や仏教に与えた影響の方が大きいと論じる。

その後、本書の五〇頁から八二頁までは、周惇頤の「太極図」が後世に与えた影響について、象数易学、道教、仏教の順に資料を例示している。この著者の綿密な調査によって、周惇頤の「太極図」及び図説が絶大な浸透性と可変性を有し、後世の思想や宗教に多大な影響をもたらしていたことが明らかになった。著者は、本篇の

最後に「清朝初期の反宋学的感情からもたらされた慎重さを欠くドグマを、いつまでも引きずっていてはならないであろう」（八〇頁）と述べている。上述のごとく、この研究は、思想史界において凝り固まった宋学や朱子学に対する既成概念を取り払うための大きな一歩といえる。

第一部第二篇は、「士大夫の思潮」（本書、八三頁～一四六頁）である。

第一章「『洪範』と宋代政治思想の展開―災異説と皇極概念」では、漢代に災異説と密接な関係があった『尚書』洪範篇が、宋代に至って再び注目されるようになったことを取り上げる。この宋代の洪範篇解釈は、洪範災異説への批判から始まり、ついで「皇極」概念に基づく新たな政治思想や君主観を生み出した。洪範篇への思索は宋代士大夫の政治哲学を形成し、その思索の精神は、朱熹の災異説批判や、皇帝政治の基準を「理」に求める立場へと継承されていく。また、この洪範篇の流行は、河図洛書に基づく象数学への関心を副産物として生み出した。この象数学への関心は、後述する朱熹の『易』解釈にも影響を与えることとなる。

第二章「晁説之について―考証学と仏教信仰のあいだ」では、北宋後期から南宋初期にかけての士人である晁説之に関して取り上げる。本章で重要なことは、晁説之が経文の校勘や訓詁に際して、資料的根拠を用いた堅実な考証を行っていた点である。著書『古周易』にも見られる彼の考証学に対する姿勢は、朱熹の『周易本義』へと継承された。

第二部は、「朱子学の思想」（本書、一四七頁～四九九頁）と題され、その紙量からも分かるように、朱子学を中心に論じた本書の核となる部分となる。

第二部第一篇は、「朱子学の基本概念」（本書、一四九頁～二四二頁）である。

第一章「道学の聖人概念―その歴史的位相」では、道学の特徴的な思想でもある「聖人可学」論（人は誰しも学ぶことで聖人になりうるという考え方）について考察する。著者は「道学における『聖人』は従前と違って精神的に高い境地を有する人格を意味するようになったが、管見によれば、その原型はいわゆる六朝玄学の中に求めることができる」（本書、一五一頁）と述べ、道学における聖人概念のルーツを探究する。結論から言うと、「聖人可学論」の源流は、孟子の全ての人の性を善

とみなし、学ぶことで誰でも聖人になれるという思想にあった。更に、著者が「道学者たちが理想とした聖人は、〈意識の撥無〉という点において六朝玄学のそれと共通し、「屢空」解釈に象徴される賢人顔回のイメージもまた玄学のそれを引き継いでいた」（本書、一八七頁）と述べるように、道学者たちはただ孟子の性善説を継承したのではなく、その過程において、新たな聖人概念と理想の賢人として顔回像とを形成した六朝玄学の思想を受け継いでいたのである。ただし、六朝玄学では聖人を「無」の体得者と捉えて、常人の「聖人可学」の可能性を否定したのに対し、道学は「聖人」を「理」の体現者（著者の言葉を借りると「人間に付与された理を、完全かつ自然に発揮しうる人格」（本書、一八七頁）と捉え、「聖人可学」の可能性を認めていた。つまり、道学の「聖人可学」論とは、近世の士大夫社会と整合性（科挙など、学力を原則とする近世社会との整合性）を図るため、孟子の性善説と六朝玄学の思想、それらに新たな「理」の概念を加え折衷することによって形成された考え方ということになる。

第二章「理の思想―朱子学と魏晋玄学」では、朱子学の基本概念でもある「理」について考察する。「理」と「気」という概念は、万物の存在論を説明するための用語として朱熹の思想を支えてきた。著者は、近年の研究動向として、朱熹の「理」概念の使用のルーツが魏晋玄学の王弼や郭象に求められているということを示す。一方、著者は、魏晋玄学の「理」と朱熹の「理」とが果たして同じ意味で用いられていたのか、という点を疑問として挙げ、双方の「理」が内包する思想について比較検討する。

まず、朱熹における「理」について、著者は「理とは物をその物たらしめる形而上的な抽象原理であり、これに対して気は物を作る形而下的な材料であった」（本書、一九九頁）と述べ、更に、「理とは、Xなるもの事物が他ならぬXなる事物であるための存在規定であることがわかる。（中略）『四本の脚がきちんと平らにそろっていること』が椅子の理であって、そうでなければ座ることができず、したがって椅子ではなくなってしまう。言い換えれば、『四本の脚が平らにそろっていること』が、椅子を椅子という存在たらしめているのである。（中略）つまり、理は気に対していかなる作用も有しない」（本書、二〇一頁）と述べ、朱熹の「理」概念について説明する。つまり、朱熹における「理」とは、あくまで存在物に対してその存在を規定する、一切の能動的作用を有さない原理のことを指すのである。

また、朱熹は「理」について、「所以然の故」（然る所以の故）と「所当然の則」（当に然るべき所の則）という二重の意味があると解釈していた。「所以然の故」は、物事がその物事で「あること」（存在形式）を指し、「所当然の則」は、物事がその物事で「あるべきこと」（当為的規則）を指すと規定されていた。前述の椅子の例を挙げるなら、「所以然の故」は、「椅子が椅子であるのは四本の脚が平らにそろっていることにある」ということであり、「所当然の則」は、「そのために椅子は四本の脚が平らにそろっているべきだ」ということになる。ここで重視すべきは、朱熹の「窮理」（理を窮める）の意味である。朱熹の「窮理」とは、結局のところ物事の「所当然の則」＝「あるべき規則」を追求することを指すのである。朱子学において、読書、学問、現実の分析が重視された背景には、全ての事物の「あるべき規則」を究明する目的があったからに他ならないということが、朱子における「理」を解析することで判然とするのである。

次に、魏晋玄学における「理」についてであるが、本稿では結論のみを簡潔に示しておく。著者が「玄学における理は、宿命的なものであって、理はもっぱら「さだめ」による先験的必然性を意味していた。理を前にして人間はほとんどなすすべを知らないのであって、できるのはただ理に随順していくことだけであった」（本書、二一三頁）と示しているように、魏晋玄学で意味するところの「理」は、極めて宿命論的な意味で、人を規定するものであると定義されていた。以上の考察より、人々が営為によって実現を目指す規範的目標としての朱熹の「理」と、「さだめ」としての魏晋玄学の「理」とは、その言葉は同じであっても、その意味するところは似て非なるものということが明示された。

第三章「朱熹の鬼神論と気の思想」では、朱熹の鬼神論及び気の概念について考察する。まず、著者は朱熹の鬼神論について、従来の思想史界における大方の見解を、「㈠鬼神を気の作用として説明することで、鬼神の神秘性を剥奪し、中国の自然哲学における画期をなした、㈡ただし、その鬼神論は祭祀の説明としては理論的に破綻している」（本書、二一九頁）の二点に要約する。著者はこの見解について、いくらかの誤解や混乱をきたしているとし、朱熹の鬼神論について再検討を行う。

原始儒教において問われることのなかった「鬼神とはなにか」という問題について、朱熹は、「鬼神＝陰陽の気」という解答を提示した。朱熹の鬼神論は、㈠北宋の張載が『易』繫辞上伝より考えた、鬼神を気の屈伸のはたらきとみなす説、㈡『中庸』の語が由来である、万物

に鬼神が偏在しているという説、以上の二つの説から着想を受けて成立していた。著者は、この朱熹の鬼神解釈によって、「一、鬼神の偏在にもとづく自然哲学が主張されたこと　二、霊的存在としての鬼神が説明可能とされたこと　三、仏教の輪廻転生説が批判されたこと」（本書、一二四頁）という、以上三つの論理的帰結を生むことになったと述べる。つまり、朱熹は、中国自然哲学における重要な課題であった鬼神の定義について、一定の合理的な解釈を加えることができた人物ということであり、見方を変えれば、後漢初期の王充などに見られる鬼神の合理化の思想を継承した人物と捉えることもできるのである。

次に、祭祀における鬼神解釈である。朱熹の鬼神論は、人が死ぬとその気も消散するという考え方が大前提となっていたが、その一方で朱熹は、祭祀の際に鬼神（死者の気）が来格（来たり格る）するとも説いていた。これら双方の現象の矛盾が、朱熹の鬼神論破綻説の根拠とされる点である。この点について著者は、祭祀における朱熹の鬼神解釈を、祖霊祭祀の場合と祖霊以外の祭祀の場合とに区分して説明する。まず、血のつながった子孫が祖霊を祭る場合には、二通りの説が提示される。第一は、人は死んでもすぐに気が消散するわけではないので、消散する前に来格するという説、第二は、一度消散した気が祭祀を行う子孫の気に応じて新たに生じ、来格するという説である。次に、祖霊以外の祭祀の場合では、祖霊祭祀の第二の説に基づいて解釈される。朱熹は、たとえ祖霊でない場合であっても、祭祀を執り行う「理」が正しければ、天地人に共通する気を通じて新たな気が生じ、鬼神が来格すると解釈している。

また、著者は、朱熹が説く「来格」の意味についても考察する。朱熹は、祖先の気は虚空に実体として存在しないと説く一方で、前述した祖先祭祀の例では、祖先の気が新たに生じて「来格」すると説いていた。一見、論理的に相反する考え方と思われるが、著者はそうではないという。祭祀における祖先の気の「来格」について、著者は「祖先のイメージが祭祀者の心の中に生起する」（本書、一三五頁）ことであったとする。つまり、祖先祭祀において新たに気が生じるということは、亡き人の姿が祭祀者の心に再現されるということなのである。つまり、朱熹の「気」には、㈠物質を形成するエネルギーとしての気、㈡存在論としては無いが、実存的にはある気、という二つの概念が含まれていたと考えられる。これらのことから、著者は、祭祀において鬼神が来格するという現象を、㈡の実存的な気が祭祀者の心中に生起さ

れるという現象のことを指していたと解釈する。

以上の考察の後、著者は朱熹の鬼神論破綻説についての見直しを提言する。著者はこうした破綻論が、あくまで存在論的に「消散」した気が存在論的に新たな気として生じ、「来格」すると考えるために矛盾が生じるのだと説く。つまり、祭祀における気が個人の実存的な感覚であれば、気はその場に存在する必要性がないので、破綻論は成立しないということとなる。

第二部第二篇は、「易学の理論と世界観」（本書、二四三頁～三一五頁）である。本篇では二章にかけて、朱熹の易学について考察する。

第一章「朱熹の象数易学とその意義」では、朱熹の『易』に対する注釈書『周易本義』『易学啓蒙』の内容について考察し、朱熹の象数易学の思想を検討する。主たる議題となるのは、朱熹の『易』解釈が象数と義理とによって説明されていたのに対し、程頤の『易』解釈は専ら義理に基づいて説明されていたという点である。結論としては、「朱熹の象数易学に見られる特徴は、『理一』であることの確信と、その理を窮めるのに客観的な象数を媒介とする認識方法」（本書、二七五頁）であったのに対し、程頤は「理」が象数に先行すると考え、象数易の要素を排除していた、つまり、両者の「窮理」の方法が違ったために『易』解釈にも違いが生じたということにある。著者が説くように、朱熹の思想が蔽う範囲は、程頤の人倫の世界を越え、遙かに広大な宇宙全体の原理にまで向けられていたのである。

第二章「『周易参同契考異』の考察」では、朱熹が晩年に至って、常々攻撃してきた道教の経典『周易参同契』について校勘注解し、『周易参同契考異』を著した理由について考察する。本稿では、「晩年、多くの著述を完成させるため、また党禁からの名誉回復を見届けるために、朱熹は衰病あらの回復を希求し、『参同契』に注目して蔡元定・蔡淵とともにその校勘注釈にとりくんだ。（中略）朱熹にとって、（中略）『参同契』は、人間の身体を構成する陰陽の気のあり方を示すものであった」（本書、三一〇頁～三一一頁）という著者の結論をもって、内容の要約としたい。

第二部第三篇は、「朱子学の方法」（本書、三一七頁～四四三頁）である。本篇では、朱熹の学問論・修養論である、「窮理」「居敬」「静座」について考察する。

第一章「重層的な知―朱熹窮理論の位相」及び第二章「格物窮理のゆくえ―朱熹以後における二つの方向」で

は、朱熹の「窮理」論について検討する。「窮理」とは物事の「理」を「窮める」ことであり、知の完成に至る「致知」（知を致す）のために必要な方法とされる。この朱熹の窮理論で興味深いのは、第一章が「重層的な知」と題されているように、朱熹が求める「知」に重層性があった点である。著者の考察によると、朱熹は窮理の方法として、恒常的な法則性から類推する方法と、帰納法における「飛躍」のように悟る方法とを説いていた。更に、個別的な理を綿密に調査分析することで、まず表層的・外面的・形而下的な「表・粗」の理解を獲得、そこに実践的な工夫を織り込むことで、より深層的・内面的・形而上的な「裏・精」を了解することができるとも説いていた。このように、自身の内面的な了解だけでなく、表層的な部分に対する理解も重視していた点が、朱熹の窮理論の特色といえる（より重視していたのは「内面的な了解」の側面であるが）。しかしながら、二程を源流とする宋代道学が専ら内的な体認を追い求めたのに対して、この朱熹の窮理論は異色であった。これには、ただ内面的な了解、つまり主観的な見知に基づくだけでは、玄妙を談ずるだけになってしまうという危惧が朱熹にあったからである。また、表層における外的・知的な認識方法は清朝考証学へと受け継がれ、一方で深層における内的了解は陽明学へと受け継がれていったという著者の考察は、朱子学以降の思想史における影響論を考える上で特筆すべき点であると思われる。

第三章「居敬前史」では「居敬」（持敬、主敬とも）について、続く第四章「静座とは何か」では「静座」について考察する。この「居敬」及び「静座」は、共に道学及び朱子学における内的修養法である。

居敬については、「居敬とは、古代の士君子のあり方に回帰しようとした道学者たちが、時代的な制約と諸条件の自覚のもとに再認識した方法であった。そしてそのさいに再度想起されたのは、古来からある『敬・礼不可分の原則』と、士君子としての行動と矜持を支える冷静な自己規制心であった。居敬の思想が仏教の止観や座禅と異なるのは、まさにこうした士君子としての行動理念に求められるだろう」（本書、四一二頁）という著者の結論をもって、内容の要約としたい。

次に静座についてである。始めに著者は、中国思想史上において方法論的意味合いを有するタームとしての「静座」を、㈠精神安定の手段としての静座、㈡内的自覚ないし自己覚醒を求める静座、㈢道教養生術としての静座、㈣仏教の禅観・座禅、という四種類に区分する。その上で、朱熹の思想における静座は、専ら㈠を目的と

して行われるものであり、根本としての学問修養を支えるための手段に過ぎなかったと論じる。朱熹がこのように説いた背景には、静座自体が目的化することで、仏教の座禅や道教の内丹術に傾倒してしまうこと危惧したためであるという。

第二部第四篇は、「政治実践とその思想」（本書、四四五頁～四九九頁）である。本篇では、七一年の生涯において、わずか九年に満たない行政官時代を過ごした朱熹の政治思想について考察する。

第一章「朱熹の政治思想」では、実際に朱熹が行政官時代に実行した施策に基づき、朱熹の政治に対する基本的な立ち位置を検討する。著者が「朱熹の政治実践が、『修己治人』を主旨とする儒教的教養によってアイデンティファイされた科挙士大夫の基本的性格に由来することは言うまでもないが、古代儒教の精神に回帰しようとする願望を強烈に持つ朱熹の場合（これは道学者一般の特徴でもある）、学問と政治を連続してとらえようとする志向はことのほか顕著であった」（本書、四四六頁）と述べるように、朱子学が「格物・致知・誠意・正心・脩身」という内的学問の修養から、「治国・平天下」という外的実践へと拡充させる思想を有していたことは、広く知られているところである。つまり、朱熹の政治における基本的立ち位置を確定することは、朱熹の思想的本質を帰納することに繋がるのである。

実際の詳しい施策の内容については、本書を参照していただきたい。本章の結論としては、「朱熹の政治思想は、中央と地方、官と民、富者と貧者それぞれが各自の責務を果たすという点に基本理念があった。（中略）朱熹の租税減免策や経界法も、恩恵としてよりも、むしろ現実の貧富状況に応じた公平たるべき政策として唱えられたものであった」（本書、四七〇頁）という著者の言につきる。しばしば現状維持を目指す保守的なイメージで語られる朱熹は、実のところ常に現実に批判的な目を向けた理想主義者であり、また改革者であり、政治的な立場として国家と民衆のどちらにも属することはなかったのである。

第二章「朱熹の中央権力批判」では、朱熹が三人の宰相に対して行った批判の事例を挙げて、「中央権力批判者」としての朱熹の人物像を探る。行政官としての朱熹は、国家権力と一定の距離を置いた人物であり、また、その政治思想は公正な理に基づいていた。「あるべき原則」＝理を目指す朱熹にとって、その「理」に基づく施策と対立することがあれば、中央権力であったとしても

批判の対象となることを免れなかった。こうした忌憚のない批判を行った結果、朱熹は中央権力から疎まれ、朱子学は「偽学」の烙印を押されることとなる。このように、朱熹は、一方では顕著な尊王思想を有する人物であり、また一方では皇帝に対しても厳しい諫言を行う「中央権力批判者」でもあった。つまり、行政官としての朱熹を「体制派」か「反体制派」かに分ける議論に意味はなく、むしろ「理」に基づく現実主義者として朱熹を理解する方が適当であろう。

第三部は、「朱子学雑篇」（本書、五〇一頁～五四八頁）と題され、本書の補編に相当する部分となる。

第一章「朱熹の事迹に関する新資料―武夷山、福州鼓山の題名石刻」では、著者による朱熹ゆかりの地のフィールド調査に基づき、朱熹及び同行者の名と来訪した年月とを記した「題石」について探究する。この「題石」によって、既存の文献資料の記録の裏付けが可能になるなど、その資料的価値は高い。本調査によって、新たな朱熹研究の方法が開拓されたともいえよう。

第三章「アメリカの宋代思想研究」は、著者が一九九五年から約一年間滞在したアメリカにおける、中国宋代の思想史研究の動向を記したものである。普段あまり知り得ないアメリカの思想史の状況を知る上でも有益であるが、二一世紀を迎えて二〇年が経とうとしている現在においては、当時と現在の研究動向を比較することができる、新たな資料的価値が付与されたのではないだろうか。

二　考察

以上、本書の概要についての紹介を終える。評者としては、本書の思想的に重要な点について凡そ取り上げることができたのではないかと思う。大部な書のため、概説的になってしまった部分や紹介しきれなかった部分もあるだろうが、その点についてはご容赦願いたい。

最後に、簡単ではあるが本書への考察を付け加えたい。それは、第二部第一篇第三章「朱熹の鬼神論と気の思想」についてである。本章で、著者は朱熹の鬼神論について、祭祀における気が個人の実存的な感覚であれば、気はその場に存在する必要性がないので破綻論が成立しないと述べている。確かに、著者の考えるように捉えれば、朱熹の鬼神論は破綻していないといえよう。実存的に気があるという状態について、著者は、日常的な参拝において、実際に神や神霊といった超自然的存在が存在していないと理解しつつも、感覚的にそういった存

在を意識してしまうという例を挙げる。この例えは非常に明解である。しかしながら、中国における「鬼神」と「合理」とのせめぎ合いは、朱熹以前から続く重要かつ複雑なテーマであり、朱熹の鬼神論についてもまだ検討の余地があるだろう。評者としても関心を向けられる議論であり、今後の展開に期待を抱くところである。

また、この他にも、周惇頤の「太極図」の由来やその影響論を考察した第一部第一篇「周惇頤『太極図』の考察」、朱熹の政治思想における立場を明確にした第二部第四篇「政治実践とその思想」など、従来の研究ではあまり触れられていなかった分野や、研究が不足していた分野について光を当てたこれらの研究は、本書の中でも特に意義があるだろう。前述の鬼神論の研究とともに、これらの研究の今後の展開にも期待したい。

著者が緒言にも述べたように、朱子学は後世にまとわり付いたイメージで理解されることが多く、それには清朝考証学者などの穿った見方も含まれていると思われる。本書は、そういった凝り固まったイメージを払拭するため、朱子学の思想的特色、あるいは朱子学が中国の伝統的思想から受容して取り入れた部分についての優れた考察を行い、我々に新たな朱子学のイメージを提示してくれた。こうした研究方法や研究に対する姿勢は、まさに本書が銘打つ通り、「新研究」と称するに相応しいだろう。評者としては、本書が提示した新たな朱子学解釈によって、儒教のみならず、道教や仏教などを含む中国思想史研究がより一層活発化することを、強く希求するところである。

（書誌情報）

吾妻重二著『朱子学の新研究』、創文社、二〇〇四年九月、全五五三頁、A5判、縦組